

藤原龍一郎著

『抒情が目にしみる 現代短歌の危機』  
クライシス

(六花書林)

塚本邦雄第十九歌集『魔王』(一九九三年)を中心に後期の作品群に光を当てて。パブル景気の社会と歌壇のライトヴァースの隆盛/太平洋戦争の記憶の生々しさの狭間でバッドテイスト(悪趣味)の作風を試みた塚本は、その三十年後の現在を予言、予見していることが浮かび上がってきた。

著者・藤原が早稲田大学の学生協の販売書籍としてリアルタイムで出会った菱川善夫・中井英夫・福島泰樹らを詳しく論じ、とくに福島についてはその「絶叫短歌」という特異な活動スタイルのため現在、正当に評価・言及する者や場が少ないことへの危惧を示す。まさに現役で活躍している今、注目すべき歌人であるだろう。

高瀬一誌・蒔田さくら子・永井陽子ら「短歌人」を支えてきた人々があいついで他界し、藤原が自らの青春時代の邂逅の感動と衝撃を書き残しておきたいという強い使命感をもって、短歌史上に輝いた人物を記録している。時代の空気とともに歌人のすがたとその作品がいきいきと立ちあがってくる。

(白川ユウコ)

山田航歌集

『寂しさでしか殺せない最強のうさぎ』

(書肆侃侃房)

『さよならバグ・チルドレン』、『水に沈む羊』に続く第三歌集。「あとがき」によると、各歌集にはそれぞれ目的があるという。その目的に合うよう、今歌集ではコミユニケーションの歌、恋愛の歌が多くなっている。

君に出会ったときの鼓動がまるつきり  
「チェリー」の出だしのドラムだった  
な

きれいごとたわごとうわごとえそらごと  
とまるごと君のなら聴きたいよ  
完璧な二人になんてなれないや死なな  
きやだいたいハッピーエンド  
東京の防犯カメラに映されたすべての  
キスを集めた映画

とても長い恋だったけど昇降のボタン  
を押せばもう終わりかな

音楽を感じさせるリズムカルな歌が多く軽快に読み進められる。タイトルにあるような作者のシニカルで分析的な視点も私は好きだが、II章末の「長歌」を読むと、人を愛し世を愛す、作者のなりたいたいわらかな作者が垣間見える。

(清水佑太郎)

大森静佳歌集

『ヘクター』

(文藝春秋)

身体とはいったい何なのか。この主体の身体は、常に自然と一体化している。運河が流れていたり、岩がぶつかったり。切り株があればかならず触れておく心のなかの運河のために

うつむいて髪あらう夜たくさんの岩が  
ぶつかるからだのなかで  
また、かたちを変えて(あるいは魂だ

け)自然や物に入りこみ、実に自在である。  
青空へわたしはろくろつくび伸びてく  
ちづけしたし野鳥のきみと  
釘のようにわたしはきみに突き刺さる  
錆びたらもつと気持ちいいのに  
さまざまなものに感情が表出しているが、  
「くるしい」「泣く」「憎む」等々、喜怒哀楽で言えは、圧倒的に怒や哀が多いのも特徴。  
妬むことは花束のようなくなるしさだ  
そうだとでもさらに束ねて  
泣く前は顔がだんだん重たくなる縄文  
時代がそうだったように  
時空を超える世界が一首のなかに悠々と  
展開されている。

(大西 淳子)